

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第四十八卷「社会科学（二の八）」

個人・自然人と超国家集団・広域共同体および宇宙進出（国際機関、  
国連、オリンピックク、軍事同盟、世界テロリズム、世界政府、国際言  
語共同体、超地球共同体、宇宙都市）

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第四十八巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、個人・自然人と超国家集団・広域共同体および宇宙進出（国際機関、国連、オリンピック、軍事同盟、世界テロリズム、世界政府、国際言語共同体、超地球共同体、宇宙都市）に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

「日韓中台が漢字の字体統一を決定」を共感覚者として考える

第三編 三十歳～三十九歳

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

編纂中。収録を待たれよ。

「日韓中台が漢字の字体統一を決定」を共感覚者として考える

二〇〇七年十一月九日 起筆、擱筆、公開

「日韓中台が漢字の字体統一を決定」 ニュース記事←

<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20071106-00000003-rcde-cn>

<http://www.chosunonline.com/article/20071103000035>

つい先日、フェロモンの話において、「聞」（キク・日、ウエン・中）という言葉の美しさについて書いたばかりなのに、その矢先のニュースで、ついに恐れていたことが起こったかという思いだが。（おそらくはエスペラントのような状態になり、結局のところ、我々庶民が使う字体は、すぐには影響を受けないと思う。いや、僕は個人的に、現在人に手紙を書くときに使っている字体、日本語を使う日本人としての字体を基準として、自分の字体と筆脈を崩さないつもりだ。手で書く漢字とパソコンで使える漢字、知っている漢字と使っている漢字は、違ってよいのだから。それに、自分が書く文字は、自分にとっての精神組織であり、ただの道具ではないのだから。）

今一度、僕がブログで書いたことを、「聞」を例にとってまとめると、現在の日本人は、「聞」を、「耳」という感覚器官を通じて音波を感覚し、聴覚情報に変換して脳で知覚する」という意味の動詞「キク」に当てている漢字であると思っているけれども、中国の「聞」には、同じく「聞く」の意味もあるが、「嗅ぐ・匂う」の意味もある。ならば、「聞」の漢字を輸入したそのときから「聞く」とだけ知覚していたのは、日本人だけの特徴かと言えば、むしろその見方こそが誤りであって、そもそも「キク」という日本語自体が、今の「聞く」が指す人間の知覚を指していなかった（つまりは、大和言葉の「キク」という行為によって、聴覚だけが引き起こされるのではなかった）。そして、「キク」を「聞く」という単独の感覚様相としてとらえるのは、非共感覚者の知覚であり、また現代の日本人の知覚ではない。共感覚には、「文字の形に色が見えたり」「音に色が見えたり」「景色に触覚を覚える」といった他の共感覚と同じく、「匂いを聞いたり」「音を匂ったり」するものがある。僕もそのタイプの共感覚を持っており、その中でも、非共感覚者の皆さんにとって最も関心のありそうな一例を述べた。それが、十月二十八日と十一月一日の記事だということになると思う。

<http://ji-art-music.sblo.jp/article/6266089.html> (十月二十八日)

<http://ji-art-music.sblo.jp/article/6370015.html> (十一月一日)

その土地固有の風土、そこに生きる個人個人にとっての精神組織である言語を簡単にいじることは、すなわち人間の知覚を組み替えているのと同じなのだということを肝に銘じておかなければならないと思う。その点では、立案者が明確に分かつていて（李朝皇帝世宗）、かつ庶民に普及したハングルは、政治が言語文化に介入してうまく行った特殊な例だと思う。ただし、それにも理由があるわけだ。韓国は、今でも漢字を廃止してみたり、復活してみたり、また廃止したかと思ったら、九十八年にまた漢字が復活して、日本よりも変動が激しいが、日本ほどは、音声、つまり聴覚上の響きが、日本人である僕から見ていて「動かない」。

日本では、「書く」が完了形になったときに、「書きたり」となるところが、「書いた」と子音を省略する。日本語では、聴覚上の経年変化は、「口を激しく動かすことを嫌う」変化と同じことになっている。こういった音韻・文法上の構造が、日本からモンゴル・トルコ・フィンランド・ハンガリーまでを含むウラル・アルタイ語族の論拠となった時代があったわけだが。現在は、世界の言語は元は一つだったという壮大な発想に行き着いたため、それぞれの語族という発想のほうが矮小化して、むしろ日本語は、親類の言語のない単独語族ということになっているが。

母音音の構造と文法構造は北方系だとするなら、日本語の語彙自

体はどこから来たかと言うと、色んな説があるけれども、多くは日本列島に日本人が住み着いた後にできたものに、ポリネシア系・オーストロネシア・オーストロアジア・ドラヴィダ語系が加わったものではないかと、僕も（多くの学者が言うのと同じく）思っている。（僕が言いたいのは、「日本語と朝鮮語と中国語を一緒にしようとしても、それは無理だ。フランス語とスペイン語とイタリア語とを一緒にしたら、はいラテン語になりました、などというのとは、根本が違うのだ。アジアの文化と言語に、西洋的手法を使ったら危険なのだ。」ということです。）

以下の記事でも書いたけれど、平安時代に、いくら「仮名をやる男は低俗だ。男は漢籍をやれ。」という風潮があっても、実際は男も仮名を書いた。それは、女性宛てに恋文や和歌を書くときであり、このことは、自ら考えていることをあえて文字に書くのであれば、「相手に合わせて文字を変える」という態度が日本人にあったこと、その姿勢こそが、人間の相互理解には適切であるということを示している。僕の意見としては、日韓中台の相互理解も、それでよいのではないか、ということになるかと思う。

参照：<http://ij-art-music.sblo.jp/article/4654851.html>（七月九日）

ともかくにも、「言葉」「文字」の扱い方が、そのままその人の「知覚」「身体性」「共感覚と言う以前の共感覚的生物である人間存

在」に直結しているという実感こそが、人間理解、そして共感覚者の知覚への理解のために、根本的に大切な姿勢だと僕は思うのだが、今はゲマインシヤフト的な人と人とのつながりは捨てられて、ゲゼルシヤフト的言語観こそがグローバルリズムを実現するという発想があるだろうから、いくら同世代の人の言葉遣いのごとく個性に合わない僕のような人間が一人でしゃべっても、意味がないだろうと苦笑するけれど。

参照：<http://ij-art-music.sblo.jp/article/5400545.html>（九月十日）

そもそも、「聞」や「手紙」のように、各国で意味を違えて使っている漢字であるのに、字体を統一したところでうまく事が運ぶとは思えないが、アジアよりも欧米のほうを近く感じている今の日本人には、日本文化とアジア文化を知るために、ある程度はこういうことへの参加は必要なのか。しかし、そもそもそれぞれの言語文化にとって最も根本にあるのは、視覚ではなくて、聴覚のほうだ。「山」は、僕ら大和民族にとっては汎神論的な神（カミ）そのものである。「ヤマ」であり、アイヌ民族にとっては神（カムイ）そのものである。「ヌプリ」なのだ。それだけは、今後何があっても、地球上からなくなつてはいけないのだ。・・・と思つたら、韓国は、いつからか古き良き固有語「モイ」を捨てて、漢語音「サン」をとって、それ

をハングル表記して用いている。これによってどうということになるか、共感覚者の皆さんは気付くと思う。つまりは、「言葉に色が見える」タイプの韓国人の共感覚者にとっては、「山」を表す音声（色）ごと変わったわけだ。今回の字体統一が、共感覚を壊すその流れとは全く別の、そして庶民の日常とは無関係の、共感覚を持たない学者と政治の世界での出来事に限られたものであることを願う。

もう一つ、思い出したけれど、今の日本の常用漢字自体が、政治的事情で決まったものだから、そもそもこれがどうしようもないわけだ。「仮定」の「仮」の字は、「暇」という字と旁（つくり）を同じくする「假定」が正しい字体なのに、いい加減に「假の右側は適当に略して”反”にしよう」などとやったために、同じ旁を持つていながら、略字とそうでない字ができた。ただ、そのことに我々国民が主体的に気付いていなければ、まだまだ日本も捨てたものではないのだが、そんなことを知らなくても携帯電話でピコピコとやれば字が分かったことになると思っている世代が増えているわけだから、そのことを僕は恐ろしいと思うわけだ。「すみません」を「すいません」と言うのは、実は「書く」の過去形を「書いた」、「すいませうみ」を「おうみ」と言うのと同じく、間違つてはいないことだが、そのことを知らずに使うのであるならば、すなわち使わないほうがいいと思う。「知らないなら使わないこと」と、「知っていて使うこと」には、罪はないが、「知らないで使っている人」が多いという現実が、「すいません」を汚い言葉にしていると思う。だから、メール

で「すいません」と言われても、相手の言語観がどうなのか、相手がどんな知覚を持って生き、どんな言葉にこだわっている人間であるかということ、そもそも尋ねるわけにはいかない時代になってしまった。識字率の高さが世界屈指であったというだけでなく、言語観の主体性において揺るぎないものがあつた江戸時代の日本人が、懐かしい。

今は、字体を国家間・文化間で統一しようにも、その基盤がおかしいのではなからうか。そういうことは、今の僕らの世代の多くの人間の日本語を見れば、分かるような気がするが。

十月二十六日の記事は、カタカナ語について書いたものだけれど、最後のほうに、漢字を政治的外圧によって自国民に強制すること、そして、そのことに気付かない日本人がどんどん増えていることが、いかに人間の知覚にとって危険か、そのことが少なくとも日本人の共感性の崩壊にいかに加担しているか、を色々と考察して書いてみた。

<http://ij-art-music.sblo.jp/article/6216409.html> (十月二十六日)